

# 看護系大学2年生の基礎看護学実習Ⅱ事前学内実習に、 模擬患者として看護系大学4年生を活用した 臨地実習における効果

前田 晶子<sup>1)</sup> 松本 智美<sup>1)</sup> 北野 みさき<sup>1)</sup> 幸 史子<sup>1)</sup>

Effectiveness of utilizing senior students as simulated patients to  
prepare for sophomore students' basic clinical practice

Akiko Maeda<sup>1)</sup> Tomomi Matsumoto<sup>1)</sup> Misaki Kitano<sup>1)</sup> Fumiko Yuki<sup>1)</sup>

1) 活水女子大学 看護学部

## 要 旨

基礎看護学領域では、大学2年生(以下2年生)を対象とする基礎看護学実習Ⅱの臨地実習事前準備として、B市の老人会会員によるボランティアの協力を得て、模擬患者演習を実施してきた。新型コロナウイルス感染症拡大以降、模擬患者を看護系大学4年生(以下4年生)へ変更した。本研究では、4年生が模擬患者を担うことによる2年生の臨地実習への効果を明らかにするために、臨地実習終了後の2年生に対し自記式アンケートを実施した。結果、「実習前」の準備に与えた効果は、【課題が明確化し実習の準備が促進】【実習への漠然とした不安の解消】、「実習中」への効果は【具体的な指導を援助に活かす】【落ち着いて援助ができた】ことがわかった。2年生は模擬患者演習と同様の場面で4年生からの助言を意識し、受け持ち患者への援助に活かしていた。また、4年生が模擬患者を担うことにより、看護技術や臨地実習における態度など具体的な助言が行われ、臨地実習に活かされていた。

キーワード：学内演習、模擬患者、看護学生

Key Words：On-campus exercises, Simulated patient, Nursing students

## I. 緒言

A 看護系大学基礎看護学領域(以下基礎看護学領域)では、より効果的な臨地実習が行えるよう、2014年度から大学2年生(以下：2年生)を対象とした基礎看護学実習Ⅱの臨地実習事前準備として、B市の2つの老人会会員によるボランティア(以下：老人会ボランティア)の協力を得て、模擬患者による学内演習を行ってきた。渡邊ら(2016)は、看護大学の教員が認知する模擬患者参加型教育の教育効果として、「臨地でのリアリティに近い」「患者をイメージしやすい」「自己課題の明確化」「学習の内発的動機づけ」「コミュニケーション能力の

形成」「看護職としての態度の形成」を報告している。基礎看護学領域の取り組みの結果について、松本ら(2020)は、「演習をとり入れることにより、模擬患者から気づきを伝えてもらうことで、ケアの提供の仕方やコミュニケーションのとり方などに学生自身が気づくことができ、『自己課題の明確化』『学習の内発的動機づけ』について効果がみられた」と報告している。

2020年度世界的な新型コロナウイルス感染症(以下：COVID-19)拡大の影響により教育方法の再考をおこなった。2年生後期の基礎看護学実習Ⅱは学生が、初めて実際の患者に看護援助を実践す

る臨地実習であるため、緊張を伴うことが予測される。例年であれば、老人会ボランティアへ模擬患者を依頼してきたが、COVID-19に感染した際に重症化しやすい高齢者にとって、大学生と接することは感染の機会を増やす危険性があった。そこで同年からA看護系大学4年生(以下4年生)に模擬患者を依頼した。4年生は教員から事例紹介、模擬患者としての役割や注意事項の説明を受け、援助後の助言を実施するまでの役割を担った。4年生は2年生に対して、臨地実習の経験をもとに、援助の方法や看護技術、コミュニケーションの取り方を具体的に助言している場面が多く見られた。よって、4年生が模擬患者を担うことは、2年生にとって臨地実習へ向けた学習の導入の際に効果があると考えた。そこで、2022年度も同様の形式で模擬患者演習を実施し、2年生にとって4年生が模擬患者を担うことが基礎看護学実習Ⅱの臨地実習にどのような効果があったかを明らかにしたいと考えた。

## Ⅱ. 方法

### 1. 研究方法：質的記述的研究

### 2. 用語の定義

臨地実習：病棟で実施される実習を指す。

模擬患者演習：基礎看護学実習Ⅱにおける臨地実習前準備の1つである学内演習である。本演習においては、4年生が模擬患者を担う。

### 3. 研究対象者

研究対象者：基礎看護学実習Ⅱ模擬患者演習と臨地実習を履修した看護学科2年生68名

### 4. 研究期間

2022年7月13日～2023年10月末日

### 5. 模擬患者演習の概要

#### 1) 日時と時間：臨地実習開始1週間前、演習

60分、助言30分

#### 2) 事例：基礎看護学実習Ⅱ受講の前提条件となる、看護過程演習(2年生前期)において学習した事例、左大腿骨頸部骨折患者について、指定した日時のバイタルサイン測定と全身清拭の援助を実施する。

#### 3) 事前事後課題：事前に行動計画、日常生活援助計画を立案し、事後に援助の振り返り、経過

表の記載、経過記録、看護計画用紙に追加・修正を指示した。記録物は、臨地実習で2年生が記載する形式である。

#### 4) 模擬患者演習の展開方法：模擬患者1名に対し、2年生3～4名を配置した。2年生の3～4名は、臨地実習において同じグループに配置されるメンバーである。2年生は担当看護師役や補助の看護師役を担った。役割は、当日に担当教員が指示をした。実習担当教員は、病棟看護師役を担った。

#### 5) フィードバック：援助実施後に机を囲み30分間の時間を設けた。2年生と4年生が自由に意見交換をできるように教員は同席せず時間管理をおこなった。

### 6. 模擬患者について

#### 1) 模擬患者の募集方法：4年生全員に対し、事例を理解し模擬患者を演じ、2年生へ助言ができる学生を募集し、期日までに応答があった4年生を対象とした。

#### 2) 事例患者について4年生は2年生次に既習していた。事前に当日のスケジュールと事例を配布した。当日は、模擬患者の役割として、事例の病態と年齢相応に合わせた患者を演じることを依頼した。助言は設定した時間に実施するよう指示した。バイタルサインや清潔の援助の際の患者への声かけの声の大きさ、目線、表情、敬語の使い方、プライバシーへの配慮、時間配分(患者の負担への配慮など)気になった点を助言することを指示した。

### 7. 調査方法

#### 1) 収集方法：自記式アンケート

#### 2) 調査期間

2022年12月13日～2023年1月31日

#### 3) データ回収方法

研究対象者が臨地実習を経験した上で、模擬患者を4年生が担うことについての臨地実習への効果を明らかにするため、アンケート配布は、臨地実習終了から1～3週間経過した全員が揃う「実習のまとめの発表会」終了後を設定した。

#### 4) 質問内容

模擬患者演習の目標である下記の項目を提示し、目標の達成程度と「模擬患者を4年生が担った

ことでよかったと思う点、そうではなかった点」をA4用紙に自由記載とした。

- (1)行動計画が記載できる
  - (2)適切な方法でバイタルサインの測定ができる
  - (3)訪室前の患者情報や訪室時に観察した内容からアセスメントし、次の行動を選択できる
- ①事例の日常生活援助計画が実施できる
  - ②事例に実施した看護を振り返り、臨地実習に向けた課題を明らかにすることができる
  - ③「行動計画」上の、援助計画の不足や記載の不足に気づき、振り返りが記載できる
  - ④患者の状態や経過を体温表に記載できる
  - ⑤経過記録に患者の状態を SOAP 形式で記載できる
  - ⑥実践した援助計画を振り返り、看護計画用紙に追加・修正できる

## 8. 分析方法

アンケートに記載された記述内容をデータ化し、記述内容より「実習前」「実習中」に分類し、「実習前」「実習中」それぞれについて4年生による模擬患者を活用した効果を抽出した。

抽出したデータは、意味単位ごとに分類し、コード化した。コードをサブカテゴリ、カテゴリ化した。データの客観性を担保する為、分析の各段階において研究者間で検討を行った。信頼性を担保するため、研究者間で意見が一致するまで検討を重ねた。

## 9. 倫理的配慮

本研究は、活水女子大学研究倫理委員会承認(22-003号)後に実施した。

研究対象者である2年生には、基礎看護学実習Ⅱ終了後に文書と口頭で研究主旨、個人情報保護、倫理的配慮、データの保管方法について記載した文書を配布し、研究は自由意志であり、研究に参加しない場合も評価に関係ないこと、同意撤回も可能であること説明した。個人情報の取り扱いについて、得られた情報は、個人が特定できないよう暗号化し、鍵のかかるキャビネットに保管し、データ分析はパスワードを設定した。

模擬患者を担う4年生には、募集の段階で研究に関わる演習であることを口頭と文書で説明した。

同意が得られなかった学生のデータは研究対象から除外することも説明した。

## Ⅲ. 結果

アンケートは68名に配布し13名から回答を得た。回収率は19.1%だった。研究対象者が記載した内容について、原文を教員4名で繰り返し読みコード、サブカテゴリ、カテゴリを作成した。4年生を活用した効果について分析した結果、33のコードから11のサブカテゴリ、5のカテゴリが抽出された。なお以下の文章ではカテゴリは【 】, サブカテゴリは〈 〉、コードは〔 〕を用いて説明する(表1)。

カテゴリについては、基礎看護学実習Ⅱを通して模擬患者演習が、臨地「実習前」の準備に与えた影響は、【課題が明確化し実習の準備が促進】【実習への漠然とした不安の解消】に集約した。学生が模擬患者を演じることについての課題は【模擬患者の課題】とした。臨地「実習中」への影響は【具体的な指導を援助に活かす】【落ち着いて援助ができた】とした(表1)。以下、カテゴリ名や表1のコードに記載する「実習」とは臨地実習を指し、臨地の記載を省略する。

### 1. 「実習前」

【課題が明確化し実習の準備が促進】は、模擬患者演習後、臨地実習への準備や心構えに変化をもたらしたことが記載された、サブカテゴリ〈準備の不足〉〈課題の明確化〉〈良い緊張感〉から抽出した。

【実習への漠然とした不安の解消】は、研究対象者が不安を抱えながら臨地実習を迎えようとしていた現状が記載されたサブカテゴリである。〈具体的なアドバイス〉〈自分たちの看護技術を認めてもらった〉〈学年間の交流〉から抽出した。

【模擬患者の課題】は、4年生が模擬患者を担うことについての課題が記載された〈模擬患者の課題〉から抽出した。

### 2. 「実習中」

【具体的な指導を援助に活かす】は、4年生の助言内容の中でも看護技術に関する具体的な場面の記載からサブカテゴリ、〈記録の書き方〉〈患者

表 1. 模擬患者を4年生が担う効果

	カテゴリ	サブカテゴリ	コード
実習前	課題が明確化し実習の準備が促進	準備の不足	自分たちが弱い所がわかった
			看護計画を立案するための患者の情報やアセスメントが不足していることに気づいた
			自分ではできていると思ったことが、できていないことに気づかされた
			援助計画の不足や病態からのリスクを考えるための知識不足、患者の安全・安楽な体位保持を保つための支え方という技術的な面での不足という課題が明らかとなった
			自分がまだまだ全然だと気づかされ、もっと勉強しないといけないと危機感を感じた
		課題の明確化	自分自身が実施した看護について何が良かったか、どこを改善していくべきかなどを理解することができた。
			悪い点、よかった点をポイントをまとめて説明してくれた
			末梢循環に関する問診やフィジカルアセスメントの意味や方法を復習するきっかけとなった
			緊張感がある演習だったためグループの一体感が生まれた
	良い緊張感	関わったことのない学生へ援助を実践でき、実習前に緊張感を持って演習できた	
	実習への漠然とした不安の解消	具体的なアドバイス	実際の実習の体験によるアドバイスは、事前にイメージをつけることができた
			私たちが気づけなかった部分について、先輩の実習での経験を交えて教えてもらい、理解しやすかった。
			実際の病院実習で体験したこと、感じたことを踏まえた「説明の仕方」や「動き」のアドバイスは、非常に参考になった
			実際に実習で経験した内容を下にしたアドバイスで、とても分かりやすかった
		現在の到達がわかる	改善すべき点だけでなく、よかった点も教えてくださったため、自分の援助に自信を持つことができた
			寝衣交換は何度も試行錯誤を行い、実施に挑み、「すぐ練習したでしょ、早かった」とほめてもらったことはとても自信になった
	学年間の交流	改善点だけでなく、「〇〇はとっても良かった」という出来ていた部分も教えてもらい、自信を持つことができた	
演習後も先輩が声をかけてくれるようになった			
同じ道を通ってきて4年まで進級した先輩の「大変だけど大丈夫、頑張れ」という声かけはうれしかった			
質問するときにとっても質問しやすかった			
模擬患者の課題	模擬患者の課題	自分たちの目線で考えてもらえた	
		できているところよりも、できていないところをたくさん言われ悲しかった	
		患者役は実際は元気で看護の知識があるため、私たちがやりたかったけどできなかった技術について状況を察して動いた	
実習中	具体的な指導を援助に活かす	技術を知っているため、力を入れたり、必要以上の協力が少なかった	
		記録の書き方の助言が、実習でも役に立った	
		個別性のある看護計画を立てることができるようになった	
	患者への配慮	記録の書き方の助言を受け、実習でも役に立った	
		手が冷たいと患者に不快感を与えると教わり、手を暖めてバイタルサインを測定した	
	コミュニケーション	バイタルサインの測定時の患者との接し方を教わり、生かした	
		支え方、声のかけ方の助言を受け生かした	
	落ち着いた援助ができた	落ち着いた援助ができた	患者の状態を確認しながら話しかけ、援助ができるようになった
			実習では援助をスムーズに実施できた
			1度先輩に見てもらったという経験から、緊張しすぎず、落ち着いた援助を実施することができた

への配慮)〈コミュニケーション〉より抽出した。

【落ち着いた援助ができた】は4年生への援助を体験し、助言を受けたことによって、実習の場面で緊張しすぎず、落ち着いた実施できたという記載があるサブカテゴリ〈落ち着いた援助ができた〉より抽出した。

#### IV. 考察

##### 1. 臨地実習への準備を促進させる効果

老人会ボランティアの協力を得ていた模擬患者演習では、模擬患者から気づきを伝えてもらうことで、ケアの提供の仕方 やコミュニケーションのとり方などに学生自身が気づくことができ、「自己課題の明確化」「学習の内発的動機づけ」について効果がみられた(松本ら, 2019)。本研究においても、

【課題が明確化し実習の準備が促進】のカテゴリを抽出できた。サブカテゴリ〈準備の不足〉では、研究対象者は「看護計画を立案するための患者の情報やアセスメントが不足していることに気づいた」〔自分ではできていると思ったことが、できていないことに気づかされた〕と具体的に不足している内容を認識することができている。〈課題の明確化〉は「末梢循環に関する問診やフィジカルアセスメントの意味や方法を復習するきっかけとなった」とあるように、何を学習し臨地実習に備えるかというところに気づく機会となっている。また、〈良い緊張感〉として、〔関わったことのない学生へ援助を实践でき、実習前に緊張感を持って演習できた〕とし、適度な緊張感をもって模擬患者演習に取り組むことができていたことがわかる。4年生が模擬患者を担うことは、これまでの学びや実習の経験をもとに患者を演じることができることに加え、新井ら(2013)は、「同じ学生としてより近い存在であることから、演習で援助する学生の気持ちや知識態度などのレディネスを想像しながら演習に参加しているのではないかと考えられる」と述べている。本研究においても、〔自分たちの目線で考えてもらえた〕とあり、模擬患者としての役割だけでなく、経験的な側面から学生のレディネスを自分自身が2年生だった頃に置き換えて参加していたと考える。「実習前」のカテゴリ、【実習への漠然とした不安の解消】より、研究対象者が自分自身の学習や看護技術の到達状況がわからない漠然とした不安の中におり、4年生からの助言で方向性を見出していることが伺える。模擬患者演習は、普段一緒に練習する仲間への援助ではなく、第三者へ援助を提供するため、失敗できないという気持ちがある。学生は事前に何度も何度も技術練習を行い、模擬患者演習へ臨む。その効果として、〔緊張感がある演習だったためグループの一体感が生まれた〕という効果もあり、模擬患者演習そのものは、臨地実習の準備として継続していく意義はある。

〔自分たちの目線で考えてもらえた〕とあるように、4年生は、老人会ボランティアに比べ、2年生の実習前に抱える漠然とした不安などを含めた立場まで理解していた。4年生は、さらに領域別

実習を終えていることで、自身の体験をもとに、事例患者を解釈し、演じることができるようになっていた。新井ら(2013)は、「上級生は臨地実習を経験することで、困難と予測されることに対処するためのアドバイスができる存在となる」と述べており、本研究の4年生についても具体的なアドバイスができる存在へと成長している。4年生に模擬患者演習に参加してもらうことは研究対象者の臨地実習準備において十分役割を果たせていると考える。

## 2. 実習中の効果

実習中についてのコードは9個と、全体の27.3%に留まったため、臨地実習中の効果をすべて抽出できたとはいえないが、9個の内容を確認すると、臨地実習の場面に効果的であったのではないかと考える。

【具体的な指導を援助に活かす】では、〈記録の書き方〉〈患者への配慮〉〈コミュニケーション〉が援助に活かされていた。4年生の助言の内容に〈記録の書き方〉〈患者への配慮〉〈コミュニケーション〉という援助場面における助言があったことがわかった。〈患者への配慮〉〈コミュニケーション〉については、事前に4年生に助言を依頼した内容であり、その内容は研究対象者の臨地実習に活かされていた。

渡邊ら(2016)は、模擬患者養成コースを受講した地域住民の模擬患者において看護大学教員が認知する模擬患者参加型教育の教育効果の一つとして「看護職としての態度の形成」を挙げている。4年生は、〈患者への配慮〉を自分自身の経験をもとに伝えており、研究対象者の記憶に残っていた。

〈記録の書き方〉については、教員が模擬患者演習前後に指導をおこなっており、特に4年生に対して指導を依頼はしていなかったが、実際は実施されていたことがわかった。模擬患者を演じる中で実施される援助の意図などを確認し、細かな援助技術の部分の記録の書き方の指導が実施されたと推測される。教員以外の意見を聞くことができたことは、研究対象者にとって貴重な学びとなっていると考える。

〈患者への配慮〉では、〔個別性のある看護計画

を立てることができるようになった] や [手が冷たいと患者に不快感を与えると教わり、手を暖めてバイタルサインを測定した]、〈コミュニケーション〉では、[患者の状態を確認しながら話しかけ、援助ができるようになった] のように臨地実習では4年生からの助言のもとに援助ができていた。二井矢(2021)は1年生と2年生のピアラーニングにおいて「教師-1年生の関係は教師主導の関係になりやすいため、1年生は知識や技術を暗記し、“分かったつもり”に留まる傾向にある。しかし、先輩-後輩の関係は学び合うという繋がりが強調されるため、学ぶ者同士の対等な関係が成立しやすく、両者が“何のために”、“何を”教え・学ぼうとしているかが大いに省察される。」と述べている。研究対象者の2年生にとっては、4年生との先輩-後輩の関係が、教師主導の関係とは異なる対等な関係からの学びの機会となったと考える。同学年の学生同士の学内演習とは違う緊張感も伴い、臨地実習において模擬患者演習の場が印象に残り過去の経験と位置付けられ、その経験を発展させた援助が行えたのではないかと考える。

### 3. 今後の演習の方向性

4年生から〈具体的なアドバイス〉を受けたことにより、研究対象者は課題を明確化し、現状を打開したいという思考に至ったと考える。自分たちの先を進む4年生の姿をモデルと捉えたのではないかと考える。臨地実習を経験した4年生から話を聞くことができたという体験は、学生の漠然とした不安の軽減に寄与し、自分自身の看護技術の到達度を確認できる機会にもなっていた。4年生からの助言は、老人会ボランティアでは補えない具体的な助言があったと考える。模擬患者の現況の調査(阿部他, 2007)では、「模擬患者活動を通して感じる負担感が、『フィードバックが難しい』が最も多かった」とある。本研究の4年生については、事例について2年生次に既習しており、事例を理解した上での参加であったことから、老人会ボランティアの模擬患者よりも病態を理解して助言ができていたと考える。地域のボランティアが参加について、渡邊ら(2016)は、教員側の評価として「臨地でのリアリティに近い」「患者をイメ

ージしやすい」ことを述べている。4年生が模擬患者を担う場合は皮膚の感覚など演出は難しいため、老人会ボランティアに依頼しないことはこのような体験の機会を失うことになる。しかし、同研究では、「模擬患者という立場から逸脱した言動」などの「模擬患者としての知識・技術の格差」を指摘している(渡邊, 2016)。模擬患者を老人会ボランティアに依頼するか、4年生に依頼するかは、模擬患者演習の目標を達成するためには、どちらが適しているかをよく検討しなければならない。本研究においては、【具体的な指導を援助に活かす】のサブカテゴリ(記録の書き方)のように[記録の書き方の助言が、実習でも役に立った]ことがわかった。これは模擬患者演習の目的の一つでもある、「記録物の記載方法の理解」においては、限定的ではあるが、学生の理解を促進していたと考える。したがって、基礎看護学実習Ⅱの模擬患者演習では、4年生を活用することがより有効ではないかと考える。

また、模擬患者演習の副次的効果としては、[演習後も先輩が声をかけてくれるようになった]のように、学年を超えて学生の交流のきっかけになった点は評価したい。模擬患者演習は臨地実習準備の仕上げのような位置づけである。臨地実習を終えた4年生との交流時期を調整し、早い時期に【課題が明確化し実習の準備が促進】できるように模擬患者演習の開催時期について検討の余地がある。

一方で、4年生の助言に効果がある反面、難しさも抽出された。[できているところよりも、できていないところをたくさん言われ悲しかった][技術を知っているため、力を入れたり、必要以上の協力が少しあった]と記載があり、4年生が熱心さのあまりに、指導に力が入りすぎた可能性もある。改善点の指摘を多く受けた学生にとっては、心理的な負担もあったと考える。模擬患者のオリエンテーションに、助言時の配慮についても含めていかなければならなかった。今回の模擬患者演習に参加した4年生はすべて自主参加で、自分の体験や気づいたことを言語化することができる能力のある学生たちであったと考える。その価値を生かすためにもオリエンテーションのあり方につ

いて検討の必要がある。

## V. 本研究の限界と今後の課題

本研究では、模擬患者演習に4年生を活用した臨地実習における効果について検討した。2年生に対し具体的な看護技術指導が行われ、2年生にとっては臨地実習の緊張の軽減につながっていることが示唆された。

結果の回収率は19.1%と低かった理由としては、模擬患者演習から1か月半、2年生が前半と後半の2クールに分かれて臨地実習へ赴いたため、アンケート配布時期が臨地実習終了から1~3週間程度経過していたことや、記述式のアンケートだったこともあり研究対象者に敬遠された可能性がある。回答数が少なかったことにより、看護学生の学びがすべて抽出できたとはいえない。今後は、臨地実習終了時点の実習の記憶がより鮮明な時期に実施するなどの時期を検討したい。さらに、より内容を深めるためにインタビューによる方法も検討していきたい。

## VI. 結論

本研究は、模擬患者演習に4年生を活用した結果、基礎看護学実習Ⅱの臨地実習における効果の一部を明らかにし、今後の模擬患者演習の方向性について示唆を得ることができた。

1. 4年生は看護技術についてより具体的な助言を実施しており、2年生は臨地実習の準備を促進させていた。
2. 2年生は4年生に対し、実習を乗り越えてきた存在として敬意をもっていた。なれ合いではなく緊張感を持って模擬患者演習に臨んでいた。模擬患者演習で経験した場面での助言が臨地実習に活かされていた。
3. 4年生による改善点の指摘が多かった学生にとっては、心理的な負担もあるため、模擬患者のオリエンテーションの内容について検討する必要がある。

本研究を実施するにあたり協力をしていただきました看護学生の皆様に敬意を表します。

尚、本研究において開示すべきCOIは存在しません。

## 引用・参考文献

- 阿部恵子, 鈴木富雄, 藤崎和彦(2007): 模擬患者(SP)の現況及び満足感と負担感: 全国意識調査第一報, 医学書院, 38(5), 301-307.
- 新井祐恵, 北尾良太, 池田七衣, 他(2013): 上級生模擬患者による看護学生の学び, 千里金蘭大学紀要, 10, 85-93.
- 松本智美, 幸史子, 井口悦子, 他(2020): 模擬患者参加型演習が高齢者や看護大学生に及ぼす効果, 活水論文集看護学部編, 6, 24-30.
- 中村江衣, 佐々木律子(2022): 基礎看護学領域における客観的臨床能力試験(OSCE)導入に向けて準備とその評価, 北海道文教大学研究紀要, 46, 61-70.
- 二井矢清香, 鍵浦文子, 杉野美和, 他(2021): 先輩-後輩関係から学ぶピアラーニングの思考過程 援助的関係をつくるコミュニケーションスキルの教育実践を通して, 日本看護学教育学会誌, 31(2), 57-68.
- 渡邊聡美, 山崎 歩, 中村もとゑ, 他(2016): 看護基礎教育における模擬患者参加型教育の教育効果と課題, 日本赤十字広島看護大学, 16, 21-28.